特集 戦後80年 消えることのない戦争の爪痕

甲飛の碑　慰霊祭

令和7年6月15日、茨城町常井にある「甲飛（こうひ）予科練の碑（以下、甲飛の碑）」において慰霊祭が行われました。ここは、零戦のパイロット、甲飛予科練第8期新本克巳（にいもとかつみ）飛曹長が戦死した地です。

昭和20年6月23日、涸沼上空でアメリカの戦闘機P－51との空中戦が起こり、茨城町だけで零戦4機が墜落しました。目撃者によると、そのうちの1機である新本さんの機体は、火を噴きながら飛んできて、大きな音を立て墜落。新本さんの体には、無数の銃弾の跡があったそうです。当時22歳でした。

常井では、平成20年から、毎年6月に甲飛喇叭（らっぱ）隊によって慰霊祭を執り行っています。

新本克巳さん

戦没地の発見

水戸市在住の住谷定（さだ）さんは、甲飛の碑や慰霊祭に深く関わっています。

平成20年、茨城甲飛会会長から「新本さん戦死の木碑を確認してくれないか。」と、甲飛予科練第15期生である住谷さんのもとに連絡がありました。

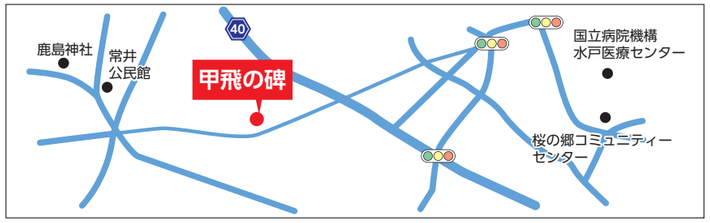
住谷さんが、地元住民の方と藪の中を捜索すると、黒ずんだ水が漂う、直径約3mの穴がありました。零戦が落ちたというその穴の水には、油が浮いており、木碑は、穴から1mほど先に立っていました。

戦没地発見から1か月半後、住谷さんは1回目の慰霊祭を開催。翌年には、茨城甲飛会会員、甲飛8期生存者、常井の有志の方の協力のもと、甲飛の碑を建立しました。

▲零戦が墜落した穴。
通称、零戦池。
元は3倍ほどの大きさだったらしい。
※現在は残存していません。

▼発見当時の木碑

▲甲飛喇叭（らっぱ）隊
旧軍関係の慰霊祭における儀仗隊・喇叭隊派遣を行うボランティア団体。
昭和54年に結成。平成24年に一度活動を終えたが、その後、戦後生まれの有志による「海軍衛兵隊11分隊」が引き継ぎ、「甲飛喇叭隊第11分隊」として存続している。



▲現在の石碑は、当初の木碑発見場所とは異なるが、新本さんの出身地・広島県の方向を向いている。

予科練時代を振り返る

住谷さんは、自身の体験を語ってくれました。

「当時は、戦い、犠牲になることが本望と思い、無我夢中でした。

訓練は厳しく、最初の10日くらいは、泣いている人もいました。午前中は座学で、飛行機の構造や飛行理論を学びました。午後は実技です。持久走、柔道、剣道、銃剣術、カッター（船）漕ぎ、通信手段（旗、手旗、モールス信号、光信号）の訓練などを行いました。

最初は三重県の航空隊に所属し、その後、奈良、清水（静岡県）、土肥（静岡県）、厚木（神奈川県）、横須賀（神奈川県）と多くの異動を経験しました。他の人はそこまで異動はなかったので、その理由を知人に聞くと、『住谷は言われたことを、なんでもすぐにこなすから。』と言われました。これは、予科練のモットーである『全てのことにスマートであれ』を実行していた結果なのかもしれません。

横須賀では、私を含め30人程度が、特攻訓練に移行しました。それが特攻訓練だったことは、戦後に聞かされました。

訓練は20日間にわたりました。朝4時に起こされ、3km走ったのちに勉強。その後、潜水艦や特殊潜航艇に乗る訓練をしました。

住谷 定さん（97）

また、塹壕（ざんごう）も掘りました。つるはしと各自で装備として持っている小さなショベルを使い、手作業でひたすら穴を掘りました。

万が一、戦闘状態になった場合には、この塹壕に隠れ、敵の戦車に爆薬を持って突っ込んでいくことになっていました。幸い、自分のいた部隊は、戦闘状態にならなかったので、生き延びることができました。」

活動の原動力

なぜ住谷さんは、新本さんの戦没地に関して、意欲的に活動しているのか、その理由を聞きました。

「予科練の伝統的精神『7つの得』の一つに、『先輩を尊ぶ』というものがあります。先輩が亡くなったと聞けば、その場所に行き、慰霊祭を行うのが伝統でした。なので、先輩を偲ぶのは、私にとって当然のことなのです。」

戦争と平和

「戦時中は万事が戦争一色となり、どん底の生活でした。食糧もなく、物もなく、街は破壊され、その悲惨さは言葉に表せないほどです。

当時の苦しみ、悲しみ、悲惨さを思い出すと、やはり平和はありがたいと感じます。平和が続くよう毎日祈っています。

現在の日本の平和を継続するためには、戦争の悲惨な現実を、後世に確実に伝えていかなければなりません。

各国で起こっている戦争を他人事と思ってはいけません。戦争は勝っても負けても悲惨な戦災だけが残ります。戦争ほど馬鹿げたことはありません。」